

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K13595

研究課題名（和文）エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究

研究課題名（英文）A Social Anthropological Study of Globalisation and Egyptian Karate-ka's Practice of Nation

研究代表者

相島 葉月（Aishima, Hatsuki）

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・准教授

研究者番号：40622171

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、ネイションを束ねる指標の一つとしてスポーツに着目し、現代中東におけるグローバルな潮流のもとに再編成される国民文化や都市中流層のイメージについて、エジプト人空手家コミュニティに関する民族誌的調査を通じて探求した。空手に関わる人々（選手、コーチ、父兄）がどのように個としての欲求と社会の期待との折り合いをつけているのかを考察することを通じて、ナショナリズムが実践される様相を考察した。日常生活において、エジプトの都市中流層がグローバル化や新自由主義の潮流をどのように経験し、向き合っているのかを把握するために、空手の練習や競技会などにおいて参与観察や聞き取り調査を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

空手はエジプトでサッカーに次いで二番目に競技人口の多いスポーツである。1980年代以降、中流層の子女の習い事として定着している。東京オリンピックで女子が組手でメダルを2つ獲得した際に、凱旋帰国したナショナルチームをピンク色の二階建てバスが空港で出迎えた。まさにナショナリズムが実践される場面であった。

本研究課題を構想したときは、空手を通じて日本文化のグローバル化について考察できることを期待していた。しかし、エジプトの空手家コミュニティにおいて、日本との繋がりは全く見いだせなかった。空手がエジプト社会に定着し、起源があいまいになったことこそが、グローバルスポーツの特徴であるという結論に至った。

研究成果の概要（英文）： This project approached karate as a cultural practice of the Egyptian middle classes and a prism through which to examine how national cultures are redefined and the social classes ideals are performed in the contemporary Middle East. I conducted ethnographic field research among karate practitioner communities (athletes, coaches and family) in order to understand how the urban middle classes experience globalization and deal with neoliberalism in their everyday lives.

When I wrote the project proposal, I hoped that I would be able to observe the globalization of Japanese culture in the Middle East by tracing the spread of karate. However, during the course of research, I have come to understand that Egyptians regard karate as a global sport and its Japanese or Okinawan origins did not bear much significance to them. Karate is a means to join the global flow which is a rare opportunity for those who are situated at the margins of the international political economy.

研究分野：社会人類学

キーワード：身体 社会階層 エジプト 教養 美的感覚 新自由主義 空手 モダニティ

## 1. 研究開始当初の背景

植民地的経験を経て世俗的近代を迎えたエジプトにおいて、スポーツは宗教に代わるネーションを束ねる一つの指標として機能してきた。特に国民的スポーツであるサッカーは、試合の応援を通じて政治思想の違いが露呈し、試合後にピッチ外でサポーター同士の乱闘騒ぎに発展することもある。2011年の1月25日革命では、サッカーチームの熱狂的なサポーターが率先して反ムバーラクを掲げた政治デモを組織した (Romel 2021、Close 2019)。サッカーの試合観戦が、人々にコミュニティの境界を実感し、帰属意識を表現する機会を提供しているのである。このように、スポーツはエジプトのネーション形成に一定の役割を担ってきた一方で、研究分野としては発展途上の段階にある。これはエジプトに限ったことではなく、国際政治経済の周縁に置かれた中東・アフリカ地域のスポーツを対象とした論考は希少である。スポーツを主題とした社会学や歴史学研究において、オリンピックや FIFA ワールドカップなどの大規模な国際大会で好成績を残すの経済大国の事例が中心で、発展途上国のスポーツ文化についてはジャーナリスト的な報告にとどまる。例外としては Arjun Appadurai (2015) によるインドの脱植民地化におけるクリケットの役割についての論考や、Wilson Chako Jacob (2011) による英領時代のエジプト (1882 - 1936) の若者がイギリス発祥の運動やスポーツを利用して、独自のモダニティを構築したという報告がある。これらの研究は、スポーツ実践はコロニアルな思想を消費するだけでなく、身体を通じて新しい価値を作り出す契機となっていることも示している。また、スポーツ実践は、グローバルな潮流とナショナルな文脈が身体的な感覚を通じて感応する場としてとらえることができる。

国際政治経済的に周縁におかれたエジプトの都市中流層にとって、スポーツはグローバル社会に参加する貴重な機会を提供している。スポーツは世界中の選手が同一のルールで競うことが前提であることから、エジプト人選手の順位が、国家の格付けのような印象を付与する。エジプトは中東・アフリカ地域を代表するスポーツ大国で、バレーボールやシンクロナイズドスイミングなどのオリンピックの中東・アフリカ枠の多くをエジプトが独占している。特に空手道は子供のお稽古事として非常に人気があり、競技人口がサッカーに次いで2番目に多く、国際大会で優秀な成績を残す選手を多く輩出している。2011年以降、政情不安への懸念から、海外からの観光客が減少し続ける中、2014年に国際伝統空手道協会の世界選手権が首都カイロで開催された。エジプトが空手の国際大会を主催国となるのは1988年以来の快挙であったため、テレビや新聞はこのイベントを大きく報じた。国際的な観光名所であるギザのピラミッドの前で外国人選手へのインタビューや空手道の形の演武の撮影が行われた。エジプトの治安を心配してのことか、外国から参加した選手数は大変少なく、出身国は中東を中心とした20ヶ国程度だった。しかし国内メディアはそのことには触れず、エジプト人選手が表彰台を独占したことのみを報じた。世界選手権に参加したエジプト人空手家はナショナルチームの活躍を心から喜び、エジプトの国際的イメージを向上することに貢献したと信じて疑わない。2013年の「6月30日革命」と同様に、国内と海外からみたエジプト像は歴然とした相違がある。情報のグローバル化時代において、ネーションの境界はゆらがないのだろうか。

## 2. 研究の目的

現代中東におけるグローバル化の広がりや民衆的ナショナリズムの興隆の接点を、社会人類学的な視座より探究することが、本研究の目的である。エジプトで2011年に起こった「1月25日革命」は、国家政治、人権保護、教育や雇用などの制度をグローバルな水準に引き上げることを目指した社会運動であった。一方、2013年に軍事政権の樹立を成し遂げたクーデターは、国際的批判を受けたものの、民衆的ナショナリズムに後押しされ、「6月30日革命」と呼ばれるに至った。二度の革命を経ても生活状況の改善が見られないエジプト社会において、都市中流層が抱く、グローバル社会や海外移住への憧れとエジプト国民としての誇りの関係性を空手家コミュニティ（指導者・競技者・父兄）の事例より考察することで、制度的な政治にとらわれない日常的なナショナリズムの展開の様相を解明する。

本研究は、人やモノ、知識などの流動に代表されるグローバル化の潮流とネイションの境界が交わった際に生じる自画像および他者像の変化に焦点をあてる。Kristen Surak (2013) の nation-work 論を参考に、空手道の稽古や競技会など日常生活の中でネイションが想起される契機や実践される形式について探究する。Helena Wulff (1998) は、パレ工業界がトランスナショナルな人の移動を前提としているものの、ダンサーは自らの出身国とパレ工団のナショナルな特徴を交渉しながら演技していることを指摘している。むしろ、人の移動によって、ナショナルな境界が浮き彫りになるのである。エジプトの空手家コミュニティの人的ネットワークも非常に流動的で、各人がより優秀な選手と指導者を求めるため、恒常的に再編されている。さらに、海外の空手家との繋がりが社会資本となる。本研究では、空手道の講習会に参加するための来日や、パリで空手道の道場を開くなど、海外経験のあるエジプトの空手家を調査対象の中心にしたいと考えている。彼らはエジプト空手家の第一世代で、1970年代に空手を始め、1980年代に海外移住を成し遂げた。2011年以降、エジプト社会に失望して海外移住を希望する若者が増えているが、彼らの親の世代と比べて、実際に移住する者は少ないように思える。海外経験のある空手家にインタビューすることで、1980年代以降ネイションの境界がどのように変化したのかを明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究は、国内外での臨地調査と文献資料のデータを組み合わせて進めた。毎年、一ヶ月ほどエジプトの首都カイロに滞在し、空手家コミュニティにおいて参与観察及び聞き取り調査を行った。1980年代にフランスに移住し、2011年にエジプト伝統空手連盟を立ち上げたイブラヒム・マルホウミ氏が2018年2月に死去したことにより、パリでの調査は一度しか実施できなかった。2020年3月～2022年5月まで新型コロナウイルスの感染症対策として公費出張が規制されたため、ソーシャルメディアを利用して民族誌的調査を進めるとともに、アラビア語文献データベース AskZad を購読して文献収集につとめた。本研究課題の要となる予定であった、東京五輪のために来日する空手のエジプト代表チームへの聞き取り調査は、新型コロナウイルス感染症対策のため実現せず、テレビ中継による試合観戦およびエジプトメディアの報道をフォローするにとどまった。

- 1) エジプトメディアによる空手に関する報道の収集と分析
- 2) グローバル化論と新自由主義に関する先行研究の外観
- 3) エジプト都市部の空手教室や競技会での参与観察及び聞き取り調査
- 4) 格闘技について研究する人類学者とのネットワーク構築
- 5) ソーシャルメディアを利用したデジタルエスノグラフィー

## 4. 研究成果

### 1) エジプト社会におけるスポーツと社会階層観

エジプトで社会階層は自明とされ、誰もが自らの社会経済的な立ち位置を意識して暮らしている。多くの人々が「自分は真ん中だ」と主張する一方で、出会った相手の服装、ふるまい、話し方などから、自分より上か下か、同じくらいかを判断する。スポーツにおいても、特定の競技と出身階層を結びつけようとする公共言説が広く流布している。例えば、卓球やスカッシュは上流層、空手は中流層、サッカーや重量挙げは下位中流層のスポーツと言われている。社会階層ごとに取り組む競技の差別化をはかることで、余暇としてスポーツを楽しむ上流層、試合での勝利を目指して練習する中流層、運動することの意義を理解できない下流層といった社会階層観が植民地期（1882～1923年）に確立され、現在も再生産されている。

空手は「中流層のスポーツ」の代表格と知られているものの、実際には様々な社会的背景を持つ子どもたちが稽古に取り組んでいる。カイロ中心部の上流層の住宅街にある会員制スポーツクラブの空手教室で調査を行った結果、中流層出身のコーチたちと上流層出身の生徒及び父兄との間でスポーツの定義が違ふことが判明した。練習に参加する子どもたちにとって空手は放課後や週末といったプライベートに行う余暇であり、ささやかな楽しみであった。それに対して中流層は空手の価値を機能主義的に説明する傾向にあり、教育や護身術など、何かしらの役立つことを強調する。空手に抱くイメージの違いが、中流層と上流層の階層観と密接に関連していることが判明した。

### 2) グローバル・スポーツとしての空手道

民族誌的調査を遂行する中で、エジプトの人々がグローバルな潮流にのる手段として空手道を捉えていることが判明した。彼らにとって、空手はあくまでも試合で勝敗を競うスポーツであり、沖縄または日本発祥の武道であるという側面は重要ではないのである。昇級・昇段試験に合格したり、全国大会で優勝したりといった、明確な目標を達成するために練習に励むことに空手の魅力があると感じている。日本語でいう「空手家」は、空手の稽古に励む生徒と先生を含み、試合での実績だけでなく、技を極めるために稽古に精進していることが重要とされる。それに対してエジプトで「カラテカ」は試合に出場する現役選手のことのみを指す。エジプトの空手の競技人口の大多数は12歳以下の子どもで、成人してからも帯を締め、道着を身につけて稽古を続ける人は極めて稀である。

カイロ中心部の中流層の住宅街にある会員制スポーツクラブの空手教室で調査をした際に、白帯から黄帯への昇級審査を受ける機会があった。地方都市で教室を運営するベテランの先生が審査を担当した。彼は、初級の子どもたちに対し、「なぜ空手の形は左から始めるのか」と質問した。戸惑う生徒たちに、「君たちが習った形は、世界中の選手も練習しているんだ。海外で空手の講習会や選手権に参加したとする。他の選手が左から始めたのに、君だけが右から始めたらどうする？隣の人とぶつかってしまうだろ？」と言った。審査を担当した先生自身も海外渡航に縁がなさそうなのに、空手教室に通う子どもたちの中に外国でプレーすることを考えている人がいるのか疑問に思った。しかし、先生が日々の練習や昇級試験の内容をグローバルな潮流に位置付けたことで、子どもたちの目は輝きを増していた。海外渡航の機会が限られている中流層のエジプト人にとって、空手道はいつか行ってみたい憧れの外国とホームであるエジプトをつなぐ道標なのである。

### 3) 新自由主義の広がりとはポスト・スポーツの試み

1990年代にエジプト政府は、国際金融機関の指導の下、社会保障政策費を削減し、資本の民営化を積極的に推奨する新自由主義経済政策の推進へと舵を切った。「新自由主義」という語彙がエジプトの公共文化に浸透しているとは言い難いが、「自己責任」や「自由」、「競争」という表現は、日常会話やマスメディアに頻繁に登場する。社会人類学者のウォルター・アームバーストが2011年の一月二五日革命を「新自由主義に抗う革命 (The Revolution against Neoliberalism)」と呼んで以降 (Armbrust 2011)、エジプトをネオリベ国家と目する視座は、人類学的研究では既定路線となっている。また、エジプトの新自由主義について言及する論文の多くは、この経済思想が現代社会の諸悪の根源として批判的に語る傾向があることは否めない。一方で、エジプトの中流層が、どのようにイデオロギーとしての新自由主義を内面化し、向き合っているのかについては十分に分析されているとは言えない。本研究では、1月25日革命で芽生えた新自由主義に抗する主体が、中流層の感性や欲求にどういった変化をもたらしたのかについて探求した。

エジプトで空手は子どもの習い事として定着しているものの、大人が稽古に取り組むことは難しい。一方で、2011年に設立されたエジプト伝統空手連盟 (ETKF) のイブラヒム・マルハウミ会長は、長年フランスに暮らした経験から、エジプトで空手を生涯スポーツとして普及することを試みた。社会学者のマイケル・アトキンソンは、カナダのヨガ教室とイギリスのフェルランニングについての参与観察を通じて、新自由主義や大量消費の論理によって主流とされてきた価値観や文化、美的感覚の境界線が溶解し、ポスト・スポーツの身体文化の台頭を促したとする (Atkinson 2010)。エジプトには大人がスポーツをする慣習がない。大人の初心者向けの運動といえば、男性はジムでの筋トレ、女性はエアロビクスくらいしか需要がないと考えられている。社会人が何か新しい運動を始めることは、想定されていないのである。1月25日革命後に開講された上流層の女性向けの護身術やピラティス教室は、試合出場を念頭に置いた子ども/若者中心の既存のスポーツとは一線を画し、大人が自分のために運動するという新しい身体文化を開拓した。2015年に半年ほど続いたETKFによる大人の初心者向け空手クラスは、新自由主義や近代スポーツの理念を脱中心化しようとする、エジプト人中流層によるポスト・スポーツの試みとして捉えることができる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Hatsuki Aishima	4. 巻 52 Summer
2. 論文標題 Global and Everyday Life in Egyptian Karate	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Minpaku Anthropology Newsletter	6. 最初と最後の頁 11-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hatsuki Aishima	4. 巻 152
2. 論文標題 Locating the Popular: Sports and Social Class Ideals in Egyptian Karate	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Senri Ethnological Series no 152 Sur la notion de culture populaire au Moyen-Orient Approches franco-japonaises croisees	6. 最初と最後の頁 157-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15021/00009754	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Hatsuki Aishima	4. 巻 46.4
2. 論文標題 Review of Religion as Critique: Islamic Critical Thinking from Mecca to the Marketplace. Irfan Ahmad. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2017. 300 pp.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 American Ethnologist	6. 最初と最後の頁 537-538
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/amet.12853	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Hatsuki Aishima	4. 巻 18:2
2. 論文標題 Consciously Unmodern: Situating the Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal	6. 最初と最後の頁 149-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14755610.2017.1326691	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 16件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 "Be Water, My Friend": Body, Knowledge and Embodiment in the Age of Mass Media
3. 学会等名 Seminar, Dutch-Flemish Institute in Cairo, Egypt (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 「友よ、水になれ」 メディア化時代の身体知のゆくえ
3. 学会等名 第540回みんなばくゼミナール (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Introduction to Panel 4: Colonial Encounters and Postcolonial Present
3. 学会等名 特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図ーわたしたちはいかに世界を共創するのか？」 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 ポストスポーツとしてのエジプトの伝統空手道
3. 学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Roundtable "Sport, Leisure, Life-and-Death: Towards an Anthropology of Martial Arts"
3. 学会等名 American Anthropological Association 2021 Annual Meeting (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 歴史の扉ーカラテからエジプト社会を考える
3. 学会等名 朝日カルチャーセンター「中東イスラーム世界への扉」(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom
3. 学会等名 みんなく特別研究「グローバル地域研究と地球社会の認知地図」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 カラテから考えるエジプトのスポーツと社会
3. 学会等名 みんなく公開講演会「グローバル化する武道と中東」(招待講演)
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 現代エジプトにおけるムスリム知識人とメディア化するイスラーム
3. 学会等名 現代ムスリム知識人の変容と交流 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 神なき時代にスーフィーになる ナセル社会主義とアブドゥルハリーム・マフムードのシャイフ探しの軌跡
3. 学会等名 慶応義塾大学言語文化研究所「イスラームセミナー」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 エジプト中流層のメディア消費と教養としてのスーフイズムの形成
3. 学会等名 日本中東学会第35回年次大会、秋田大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Escaping the Nafs in Socialist Egypt: 'Abd al-Halim Mahmud's Search for a Sufi Master
3. 学会等名 Centre Seminar, Oxford Centre for Islamic Studies, UK (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 現代エジプトの社会階層とスポーツ実践ーポストスポーツとしての空手道の試論ー
3. 学会等名 第171回東北人類学談話会、東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Branding Sufism for the Middle Class: Mass media and 'Abd al-Halim Mahmud's Sufi Da'wa in Post-Socialist Egypt
3. 学会等名 Media and "Public" Islam in Africa and Elsewhere, University of Florida, USA（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Orientalising the Orient? Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt
3. 学会等名 Arabic and Islamic Studies and Japanese Studies, Faculty of Arts, KU Leuven, Belgium（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 フェイスブック世代の若者とイスラーム 現代エジプトの都市中間層によるメディアの消費をめぐって
3. 学会等名 現代中東若手共同研究「アラブ世界における近代的メディアとイスラーム」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 空手道にみる現代エジプトの社会階層とスポーツ実践
3. 学会等名 民博共同研究会「ネオリベラリズムのモラリティ」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Competing Aesthetics of Power in Egyptian Karate Trainings
3. 学会等名 116th Annual Meeting of the American Anthropological Association, Washington DC (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society
3. 学会等名 The Center for Global Islamic Studies, University of Florida, Gainesville (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Globalisation from its Margins: Searching for Karate's Budo Roots in Contemporary Egypt
3. 学会等名 Middle East Centre Friday Seminar Series, St Antony's College, Oxford (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Orientalising the Orient?: Searching for Karate 's Budo Roots in Contemporary Egypt
3. 学会等名 New Research on Japanese Martial Arts: From Inside Japan and Out, the Bath Royal Literary and Scientific Institution, Bath (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hatsuki Aishima
2. 発表標題 Introduction & Orientalising the Orient?: Searching for Karate 's Budo Roots in Contemporary Egypt
3. 学会等名 French Orientalism and its Afterlives in Japan and the Middle East, Maison de la culture du Japon a Paris (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 現代エジプトのスーフィズムにおける自己主体性とモダニティの位相
3. 学会等名 民博共同研究会「個 世界論 中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 現代エジプトのスーフィズムにおける自己主体性とモダニティ
3. 学会等名 第281回民博研究懇談会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 エジプトでイスラーム思想のテキストを読む
3. 学会等名 第406回みんぱくゼミナール
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 相島葉月
2. 発表標題 「1960～70年代エジプトのラジオスター」アブドゥルハリーム・マフムードのメディア戦略とダアワ
3. 学会等名 現代中東地域研究若手共同研究「アラブ世界における近代的メディアとイスラーム」第3回研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 西尾哲夫、東長靖（相島葉月）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 392
3. 書名 中東イスラーム世界への30の扉（グローバルスポーツとしての武道ーカラテからエジプト社会を考える、pp.49-59）	

1. 著者名 小杉泰、黒田賢治、二ツ山達朗（相島葉月）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 281
3. 書名 大学生・社会人のためのイスラーム講座（第3章イスラーム復興 西洋モデルに依存しないイスラーム的近代の試み、pp.41-54）	

1. 著者名 イスラーム文化事典編集委員会編（相島葉月）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 748
3. 書名 イスラーム文化事典（スポーツ、伝統的武術（エジプト）, pp.100-101）	

1. 著者名 Irfan Ahmad (Hatsuki Aishima)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Berghahn	5. 総ページ数 172
3. 書名 Anthropology and Ethnography are not Equivalent: Reorienting Anthropology for the Future (Beyond Correspondence: Doing Anthropology of Islam in the Field and Classroom, pp.20-35)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------